

「共に創る学び」の 意義とは？

本特集で取材させていただいた取組から、多様な人と協働することの
さまざまな意義が見えてきました。ご自身の学校においても、
協働の意義について改めて考える機会にいただけますと幸いです。

25ページ



島根県益田市

- 益田市のライフキャリア教育の最終目標は「自分の人生を能動的に生きていくことができる力を育む」こと。そのためにはどんな仕事をしたかだけでなく、**どうありたいか、どう生きていきたいか**という、職業人として以外の「**今を生きる**」大人の生き方に**触れることが重要**と考えました。

笛吹高校（山梨・県立）

- 本校はスクール・ミッションに、『主体的に学ぶ力を育て、地域に根ざし、地域に貢献し、地域のリーダーとなる人材を育成すること』を掲げています。その実現には、学校と地域が“面”でつながり合うことが非常に重要です。
- 地域を元気にしたいという思いは共通**です。CS委員の皆さんが元々もつ**地域愛が、生徒に接するなかで一層強まっているように感じます。**

5ページ



8ページ



大阪ビジネスフロンティア高校 （大阪・府立）

- 連携先の方になぜここまで協力的なのかと尋ねると、『高校生と一緒にやるのが楽しいから』とおっしゃるんです。『生徒の笑顔がいいんだ』と。かかる時間、お金、労力といった損得ではないんですね。それは生徒も同じで、アルバイトとは違って**お金が稼げるわけではなくても、楽しいからやると。みんなイキイキしていますし、学校とは違う一面を見せる生徒もいて、**学びの場は学校だけじゃない、教科書では学べないことがあるということ**を身をもって感じています。**

佐用高校（兵庫・県立）

- 大事なのは、自分たちが得た知識・技能がどう役立つか、自分たちが生み出したものが社会にどのように受け止められるか、を知ることです。地域の方々と直接コミュニケーションをとるなかで、商品や接客がどのように受け止められるか、ネガティブな反応も含めてリアルに経験することが、家庭科という教科の学びにおいても重要だと考えています。
- 高校生にとって、自分のアイデアと行動力で地域を少しでも変えたという経験は、とても大事なんじゃないかと思うんです。将来の活躍の場が佐用であろうとなかろうと、高校生に地域に愛着や誇りをもってほしい。



11ページ

15ページ



菊の湯（長野県松本市）

- おやこ菊の湯のエピソードのように、今は《手伝ってもらう側》だけど、次は《手伝う側》にも回れるような関係を意識的につくることで、コミュニティは発展するし、持続可能になると思うんです。
- 応援する側とされる側の関係で終わってはもったいない。その先まで意識して、良い関係を築いていきたいと思っています。

大宜味村観光協会 （沖縄県大宜味村）

- （未熟な言葉でも）口にすることで、相手から反応があるし、自分でも持ち帰って勉強するじゃないですか。そうやって学び、考えを深めるなかで次第に、未熟だった言葉が、自分自身の本当の言葉に変わっていく気がするんです。すると、幸運なのか必然なのかはわかりませんが、関連する人を紹介されたり、貴重な情報を頂いたり、どこからともなく解決の糸口が訪れる。最初に意味を深く考えることも大切かもしれませんが、それで言葉や行動が止まってしまってはもったいない。意味はあとから育つものだと思っています。



20ページ

■あなたの学校にとって、学校外の人と協働して学びを創ることにどのような意義があるでしょうか？

その一歩から、 学びや意味へと 続いていく

今号では、「社会と共に創る学びの現在地」をお届けしました。学校外との連携や協働と聞くと、周到な準備や明確なゴール設定がなければと、つい身構えてしまう先生もいらっしゃるかもしれません。しかし取材を通して見えてきたのは、多くの素晴らしい実践が、実は手探りの小さな一歩から始まっているということでした。

例えば、誰かに「こんなことを考えている」と話してみる。すると、思わぬ協力者が現れたり、面白いアイデアに発展したりする。初めは曖昧な言葉でも、対話を重ねる中で考えが深まり、やがて「自分自身の本当の言葉」へと育っていくと語る実践者もいました。

また、関係者全員が同じ一つの目的を意図して共有する必要はないのかもしれませんが、参加者それぞれの多様な動機や期待を尊重し、互いに助け合う関係性そのものが、答えのない問いに共に挑む力になります。どちらかが一方的に「支援する／される」という関係ではなく、関わる人たちの「楽しい」「ワクワクする」という気持ちが原動力となり、学校と地域が互いにメリットを享受できる関係が自然と築かれていく中で、活動は持続可能なものになっていくのだと感じました。

社会と共に創る学びは、時に調整が大変で、面倒な道のりに感じられるかもしれませんが、決して一人で全てを背負う必要はありません。まずは肩の力を抜き、校内外のさまざまな人を頼りながら、共に創るプロセスそのものを楽しんでみるのはいかがでしょうか。本特集が、その新たな一歩を踏み出すささやかなきっかけとなれば幸いです。